



7月18日(水)

きょうで5日間の“ボランティア”も終わり、明日の朝には空路ウランバートルに戻る。1日5組くらいの親子と“面談”した。適切なアドバイスをできたとは思えないが、リハビリを兼ねて3日続けて来所した熱心な母子もいた。

リハビリ担当のサスターナ家の夕食に招待された。彼女はセンターからタクシーで15分ほどのホブド郊外のゲルに住んでいる。塙で囲まれた敷地内の何棟かあるゲルのひとつに案内された。そこがサスターナ夫妻のゲル。訪問してはじめて知ったのだが、ふたりともカザフ族。モンゴルは人口の80%くらいがハルハ族でカザフ族は数%。一昨日訪れたゲル博物館で、少数民族のゲルをたくさん見た中に、カザフ族のゲルもあった。カザフ族のゲルは他の民族のゲルに比べると、大きくて高さも3mくらいあり、入口は太陽が昇る東側にある(モンゴル式のゲルは南に入口がある)。ゲルの中は、華やかで美しい伝統的な刺繍が施された、寝具やタペストリーやクッションで飾られていた。彼らは敬虔なイスラム教徒で、夫は教会関係の仕事をしているとのこと。酒は一滴も飲まないというのに、私たちは迂闊にもアルヒをお土産に持って行ってしまった。食事の後で、彼はドンブラという洋ナシ型の弦楽器(カザフの民族楽器)を演奏してくれた。“親の会”の人たちとMはモンゴルの歌を歌い、最後は日本の歌を…ということになり、Mとふたりで歌ったのが“ふるさと”。

薄暗くなりかけた8時過ぎにお暇した。往きはタクシー2台だったが、帰りは1台しかみつからなかったので、“親の会”の人たちとツォゴウと私たちの総勢7人が折重なるように乗り込んでセンターまで戻った。運転手をいれると8人、日本では

ありえない!

7月19日(木)

朝の早い便で10日余り滞在したホブドからウランバートル(UB)に戻る。ツォゴウは8月上旬までホブドに残って弟のジェンコと過ごす。彼女の母は私たちと同じ便に乗る。

センターを出発する8時前には、“親の会”の人たち、リハビリ担当のサスターナ、初日に18歳の少女に付き添ってきた祖母の盛大な見送り(?)をうけて空港に向かった。ガイドブックには国内便でも3時間前には空港に着いているようにあったが、私たちはモンゴルタイムだったので、搭乗手続きに遅れてしまった。知事の車の運転手が話をつけてくれて、無事チェックイン。飛行機にはモンゴルタイムがないことを学習した。

定刻にUB空港到着。連絡してあったダミは交通渋滞とかで迎えに来られないという。とりあえずタクシーでツォゴウの母親の家に行くことにした。彼女の家はモンゴル大学近くの集合住宅の11階。すぐ隣のスーパーで買い物をして、彼女が食事の用意をしてくれているあいだ、私たちはジェンコの部屋で彼の訓練器具や教材をみせてもらったり、シャワーを使わせてもらった。

ホブドではセンターに風呂もシャワーもなかった。1回だけサウナに行ったが、それ以外は洗面所で清拭や洗髪をしていた。UBの私たちの宿舎では、洗面所にはバスタブがあるのだが、私たち日本人が蛇口をひねるときは、なぜかいつも温水が出てこない。だから短時間のシャワーですませていた。これも日本ではありえないことだが、慣れてしまえばそれほど苦にならなかった。それでも、ツォゴウの母の家での熱い湯の出るシャワーは嬉しかった。

夕方デルメが迎えにきてくれた。食事をしながら、デルメの通訳で息子のジェンコの話になった。ホブドでジェンコの滞在しているゲルを訪ねたときにも、ツォゴウの通訳でジェンコの成育歴、日常生活、将来に向けての課題など話をきいたが、彼女はもっと話をしたかったのだろう。そろそろ思春期のジェンコに母親としてどう向き合っていたらよいのか悩むことがあるという。Mが具体例をあげて話をするのを、納得して大きく頷いてメモをとったり、「ええ～！それってちょっとお～…」と戸惑った表情をしたりしながらも、かなりつっこんだ話ができた実感した。

これからは母親だけではかかえきれない問題も待ちうけているだろう。ジェンコの父は、秋には知事の任期も終わり、来春にはUBに戻ってくるかもしれないとのこと。そろそろ父親の出番かも…。それにしてもデルメの通訳は素晴らしい。

7月23日(月)

UBに戻ってからの数日は、市内の美術館や博物館めぐりをして過ごした。

ゲルに泊まりたいという私の希望がかなって、きょうから3泊4日でテレルジのツーリストキャンプを予約した。テレルジはモンゴル人や外国人の旅行者がたくさん訪れるUBから車で2時間ほどの保養地だ。ホテルやツーリストキャンプがいくつもある。ザヤの運転で娘のスンダリ(1歳半)、ザヤの友人のマントハイとムギとムギの娘のミッシェル(生後6か月)、それにMと私、総勢7人で出発した。

途中のスーパーで朝食用の食料を買って12時過ぎにキャンプに到着。20棟ほどの宿泊用ゲルと、別棟に清潔で明るいレストランとシャワー室とトイレがある。私たちは2棟のゲルに分かれて落ちついた。ゲルのドアを開けておくとリスが入ってきた。のどかである。それからレストランに昼食を食べに行った。オーダーしてから料理がテーブ

ルに並ぶまで1時間以上も待たされたが、誰も文句ひとつ言わず、ゆったりとおしゃべりしながら待っている。欧米人も多く宿泊しているからか、料理の種類もバラエティーに富んでいる。ボリュームもあるので、数種類頼んでシェアする。

夜は冷える。セーターやヤッケを着こんでも寒い。薪ストーブを焚く。

7月24日(火)

朝食後、車で15分くらいのところにある亀石までドライブ。自然の力で岩が削られて巨大な亀の形になった岩山だ。マントハイとふたりで亀の背中のゴツゴツした岩山を登ることにした。彼女に助けられて首のところまで登るとそこからの眺望は素晴らしい。マントハイは、夏休みで今はモンゴルに帰省しているが、トルコの大学に留学中の医学生。4年生で将来はモンゴルに戻って小児科医になりたいという。留学先としてトルコを選んだのは、ヨーロッパや日本に比べて、物価が安く暮しやすいからとのこと。モンゴルの若者で、留学先としてトルコを選ぶのは、それほど珍しくはないそう。そんな話をしながらひと休みして岩山を下った。

キャンプに戻って昼食後、きょうはこの地域のナーダムということで見に行った。小規模のナーダムなので、モンゴル相撲、競馬、弓射を目の前で



カザフの民族楽器・ドンブラを弾くサスターナの夫

見る事ができた。ここのナーダムは女性も弓射をするようだ。

7月25日(水)

ゲルの外で物音がするので目が覚めた。まだ薄暗い。ソーッと戸を開けて出してみると、牛がゲルのすぐ傍で草を食んでいる。隣のゲルの傍にもいる。食べ終わって朝靄の中を山のほうへ戻って行く牛もいる。薄着で飛び出してきてしまったので、着替えをしてまた出してみると、もう牛の姿はなく、朝日が少し射しはじめていた。

午前中、Mとマントハイと私の3人は馬に乗ることにした。10年以上も前に内モンゴルで一度乗ったことがあるが、そのときはお尻の皮が擦り剥けて何日も痛かったことしか覚えていない。私が不安そうにしているのを見た馬主が、自分も馬に乗り、私の馬の手綱を持って引っ張ってくれた。Mとマントハイはどんどん先をいく。30分ほど進み、その道をまた折り返して戻ってきた。帰りは助けなしで私も自分で手綱を持って、ちょっといい気分を味わうことができた。私が何の苦労もなく戻ってこられたのは、馬主がおとなしい馬を選んでくれたのと、馬は自分の家に帰るので、何の文句もなかったからだろう。お尻の皮が擦り剥けることもなく無事1時間の乗馬は終わった。

夕方、急に空が暗くなり、雷鳴が轟き、大粒の雨が降りだした。バケツをひっくり返したような大雨だ。四方を山で囲まれているからか、雷は上から下に落ちるのではなく、右の山からゲルの上空を通過して、左の山へ落ちるように感じられた。2時間ほど続いてやっと雷は山の向こうに去り雨もあがった。ゲルの天井とストーブの煙突の隙間から雨が吹き込んでいて、ストーブの傍にあった薪も濡れてしまった。

7月26日(木)

きょうはもう午前中にチェックアウトしてUB



ゲルの傍で草を食む牛(テレルジのツーリストキャンプで)

に帰る。

今朝も牛が草を食べにゲルの近くまで来るかと期待して早起きしてみたが、牛の姿は見えない。それもその筈、よく見れば、私たちのゲルの近くの草は昨日までにあらかじめ食べつくされてしまっていて、土が見えていた。朝食にはまだ時間があるので、正面の低い山(丘)の向こうにはどんな景色が広がっているのかと、ちょっと散歩くらいの軽い気持ちで歩きだした。15分ほど歩いて頂上に着くと、そこからは別のツーリストキャンプのゲルが見渡せた。朝露でGパンの裾がグッショリ濡れてしまっていて重かった。

チェックアウトを済ませ、荷物をゲルから車まで運ぼうと外に出ると、後ろの山のほうからメー、メーと山羊か羊のような鳴き声が聞こえてきた。そしてしばらくすると羊が1頭また1頭と姿を現わし、草原を横切り向かいの森に消えて行った。羊はみなほぼ同間隔で同じペースで歩き、その行列は切れ目なくしばらく続いた。何頭くらいいたのだろうか。数えなかったからわからないが、とにかく数えきれないほどたくさんいたのである。羊を追う人間の姿は私の目では確認できなかった。人間よりも優秀な羊のリーダーがいるのかも…。

帰り道は交通渋滞にはまり、往きの倍ちかく時間がかかってUBに戻った。

(続く)